

第3回 植物園整備検討に係る有識者懇話会 議事録

■角田文化施設政策監より冒頭挨拶

植物園整備検討に係る有識者懇話会の開会にあたりまして一言ごあいさつ申し上げます。皆様におかれましては、大変お忙しいところをご出席いただきありがとうございます。またリモート参加も含めまして本日全員ご参加ということで重ねて御礼申し上げます。本日は第3回の懇話会ということでございますが、前回の懇話会でもご議論いただきました「栽培」、それと「研究」、「学習教育」、そして「魅力」という四つの論点で資料をご用意しております。それぞれのご専門の立場で、ご意見、ご提案等を頂戴できればと思っております。また、今回はさらに突っ込んだ具体的な部分のご意見も頂戴したいと思っておりますし、その後の植物園職員のワーキング、或いは地域の皆様・利用者の皆様のお声なんかもご紹介をさせていただきたいと思っております。

また、この間委員の皆様には、この懇話会の開催日のみならず、岩科座長を初め、様々にアドバイスご助言いただいております。昨日は、染川委員がバックヤードをご覧いただき職員にもご助言いただきました。また、石川委員におかれましては9月・10月と、南アフリカ、イギリス、マレーシアを訪問された時のご様子なんかも写真とともにご紹介いただいております。本当にありがとうございます。

ご本人、おそらくおっしゃらないと思っておりますので、私の方から少しだけご紹介をさせていただきますが、キュー・ガーデンをご訪問されましたのもボタニカルアートの分野に貢献された方に送られる、イギリスシャーリー・シャーウッド植物芸術賞。これ、世界初の受賞者としてその授与式に臨まれたということで、心からのお祝いを申し上げます。また、その時のお話なんかも今日ご紹介あるかなというふうに、楽しみにしております。

委員の皆様からは、忌憚のないご意見、ご提案などを頂戴できることをお願い申し上げます。簡単ではございますが、開会にあたりましてのあいさつとさせていただきます。

議事 府立植物園整備に係るコンセプトと施策の方向性について

■冒頭説明

<岩科座長>

本日、用意していただきました議題ですが、府立植物園整備に関わるコンセプトと施策の方向性についてということです。コンセプトというところは、日本国では憲法みたいなもの、背骨みたいなものですから、このところはしっかりしておかないと、この後の細かいところは進められないと思っていますので、まずはこのコンセプトについて、本日はしっかりと、皆さんで議論できたらと思っています。

それでは、京都府の方からよろしくお願いします。

<京都府>

お配りしております資料に基づきまして、ご説明をさせていただきます。

表紙1枚めくっていただきまして、本日、議論いただきたいことということで論点を挙げさせていただきます。1点目はこれまでご意見いただいた内容や、この間、京都府で地域の役員の方々や利用者・府民の方々のご意見をお聞きしておりますので、その概要をご報告させていただきますが、そのあたりを踏まえまして、京都府が考える整備に向けた考え方に関してご説明させていただきます。それから、上記の考え方を踏まえた施策の具体的な方向性に関しまして、ご報告させていただきます。その上で、国内外の先進的な植物園における取り組み事例や、利用者のご意見、職員ワーキング等を踏まえ、専門的な立場からのご意見を頂戴いただければありがたいと考えております。

1枚おめくりいただきまして、第2回有識者懇話会の主なご意見を改めましてご紹介させていただきます。「魅力向上」、「学習教育」、「栽培研究」の三つの項目にまとめております。

まず最初は「魅力向上」の部分についてです。いろんな世代がお見えになっておりますけれども、将来の発展を考えると若い世代、子供にとって魅力あるものにすることが大事だというご意見。それから、統一感のあるデザインによるホスピタリティの提供など民間視点も

入れた新しい着想も必要だというようなご意見がありました。また、植物の面白さを知らない子供たちにまた行きたいと思うような楽しみを提供することも大事だということ。それから、植物園の魅力ということと植物の魅力っていうことを整理して考えると面白い展開があるのではないのかということ。それから、京都をキーワードにして、植物、生物の多様性などを発信するブランディングなどを磨くことで魅力が向上するのではないのかということ。それから、植物園 100 年の歴史の背景など植物のストーリーが分かると、植物の触れ合い方も変わってくるのではないのかというようなご意見をいただきました。それから、夢のある魅力化は重要だけれども、一方で運営も含めた持続可能な財政基盤、そういったことを府民に説明する視点も大事だというご意見をいただいております。さらに先ほど座長からもございました、京都府府立植物園がどうあるべきかコンセプトをしっかりと考えるべきだというご意見を頂戴しております。

次に「学習教育」ですが、植物園に来て教えるということではなくて、自主的に楽しみ来てくれる施設である必要があるというご意見を頂戴しています。それから、世代に応じた魅力を整理して、教育学習への繋がりを検討していく必要があるのではないのかということ。さらに、教育普及を考えると学芸員が非常に大事だというご意見。それから、植物のニーズは世界規模で考えると非常に高く、オープンな科学の場という視点で議論を進めていって欲しいというようなご意見を頂戴しています。さらには、京都周辺のすべての固有植物や貴重な日本の絶滅危惧種が見られるというような、他にはない魅力を付け加えるといいのではないのかということ。それから、得たい学びに繋がる幅広いプログラムの提供をして欲しいなというようなご意見を頂戴しています。

次に、「栽培研究」の部分です。生きたものが目の前にある植物園というのは生物を研究するには一番いいゲレンデであり、植物の研究施設を持つべきだというご意見を頂戴しました。それから、生物多様性や植物多様性の問題に対応する中核になっていくような取り組みをしてもらいたいというご意見。それから、外部の公的資金や科研費をうまく引き出しながら、財政確保しつつ取り組んで欲しいということ。それから、これまで植物園がやってきま

した栽培に関する創意工夫、技術継承、これも立派な研究だというご意見頂戴しております。さらには、専門的、学術的な研究成果を一般の人でもわかりやすく展示をするという必要があるというご指摘を頂戴しています。二つほど飛びまして、バックヤードは広ければいいということではなく機能や実績が大事だというご指摘。それから、研究という言葉、概念、こういったものを府立植物園としてどうあるべきか、今後の方向性に織り込んでもらいたいというご意見を頂戴したということでまとめております。

1枚めくっていただきまして、利用者からの主な意見についてご紹介させていただきます。この間、地元の自治会、六つの学区の役員の方々をはじめとして、周辺によく植物園をご利用いただいている幼稚園保育園など15園。それから小中高校、福祉施設などについてもご意見を頂戴しております。また、よくご利用いただいている幼稚園の保護者の方々のワークショップなども開催して、ご意見を賜っているところでございます。

簡単に概要だけご説明をいたします。全般的なご意見として、絶滅危惧種や生態系を守る植物園であって欲しいということ。それから、植物に関連する昆虫や魚もあわせて展示をして入園者に感激を提供できるような見せ方の工夫が欲しいというようなご意見。それから、子育て世代に多く聞いた関係もございしますが、子供や子育て世代の母親が喜ぶ施設にして欲しいというご意見。それから、園内の禁止事項が多い、理由もわからないので親として非常に気を遣う施設の印象があるというような、少し厳しいご意見も頂戴をしております。また、無料入園者の対象区分や料金体系を見直していくことも必要ではないかというご意見を頂戴しています。

次に下の左側、魅力と憩いの場へのご意見でございます。日陰がなくて夏暑すぎるってというようなご指摘があります。日陰で休憩できる場所や水遊びができるようなエリアがあるといいなというご意見。それから、少雨でもイベントが決行できるような屋根があるといいなというご意見。それから、大きな芝生地は子供を自由に遊ばせることができるのでいい環境だというご意見をいただきました。それから、例えばスタンプラリーなど、目的を持っていけるような仕掛けが、園全体であるといいというようなご指摘。それから、親子連れとか子

供だけでも楽しめるような内容のツアー開催のご希望ですとか、温室はいい施設だけれども、少し汚い印象があるというようなご意見もいただきました。それから、キノコ文庫は屋外で本を読める施設だと思うが、少し老朽化していたりするので、本の更新や機能のリニューアルが必要かなというようなご意見。それから、長時間滞在するような場合には、お腹を空かせた時にワゴンカーや売店・カフェがあるといいなというご意見。それから、子供や高齢者の方の足を考えると入口が少し少なくて不便だなというようなご意見も頂戴しています。それから、園内の切り株を並べて遊べるような形にするだけでも子供は新鮮に遊んでいるというようなご意見を頂戴しました。

次に右側に移りまして教育学習の部分ですが、絶滅危惧種の保全や歴史的に価値のある植物の保全は大変興味深く、こうした取り組みを子供たちにしっかり紹介して欲しいというご意見をいただいております。それから、樹木の姿を森の上から見られるようになるとういというようなご意見がありました。それから、植物園に説明はあるけれども難しすぎてよくわからない、なかなかそれでは見る気にならないというようなご意見もいただいております。それから、植物園が研究して学べるようになると、近隣の小中高校なんかにも、喜ばれるのではないかというご意見。それから植物園は理科だけではなくて、国語図工でも幅広く使われている。職員からの説明も大変好評だというようなご意見をいただいております。こうしたことを学習プログラムとして設定して、多くの子供たちが利用できるようになれば、もっと良くなるのではないかというようなご意見をいただいております。それから、植物生態園は来園者にあまり知られてなくともったいないというようなご意見。それから、どんぐり、松ぼっくり等を用いたワークショップがあるといいというご意見。それから、動物園や水族館と比べると少し植物園は魅力的なコンテンツを提供できていない状況があるのではないかなというような疑問の提示もありました。木育という視点も切り口としていいのではないか、こういったようなご意見をいただいているところでございます。

引き続き、植物園からワーキングの取り組み等の説明をよろしく申し上げます。

<植物園>

それでは簡単に職員ワーキングの実施状況について説明いたします。

資料4ページになります。これまで、6回ほど職員ワーキングを実施しており、先進地視察に行ってきました。職員ワーキングですが、今年4月に職員にアンケートをとり、それをベースにワーキングを実施しました。6月と7月の計2回実施し、第2回懇話会資料「植物園職員が考える未来の府立植物園像」ということで取りまとめております。その中で、「栽培」、「研究」、「学習」、「魅力向上」と4つのキーワードについて、まとめていこうということで進めております。

そして、園全体のコンセプトの方の検討にも取り組んでおりますが、他に植物園の観覧温室の老朽化についても問題があるので、植物園の観覧温室を移転するのか、リニューアルするのか、詳細を議論する前にまずこの10年ぐらいにリニューアルした植物園を見に行こうということで、植物園の先進地視察を行っております。9月に東方向として、水戸植物公園、神代植物公園、新宿御苑。西方向として広島植物公園、ときわミュージアムで勉強してきました。移転かリニューアルか、メリット・デメリットについて整理をするため、主に観覧温室の管理の仕方、展示方法、熱源など。その他、入園門、インフォメーション機能、カフェ、トイレ、そのような施設について、延べ19名の職員で視察にいきました。温室以外の、個別施設の検討を進めるにしても、観覧温室が移転するのか、リニューアルするのかによって全体への影響が大きいため、観覧温室の議論を優先して検討を進めているところです。

そして、10月に植物園整備検討プロジェクトチームというのを立ち上げ、先ほどご説明した4つのコンセプトに基づく具体的な方策と、施設の具体的な検討について、毎週、木曜日に実施しています。次回以降の懇話会につきましても、このような検討に基づきまして、委員の方々に園の意見を提示していきたいと考えております。

プロジェクトチーム会議の中での主な意見ですが、4ページの下にも書いてあるとおり、決定事項ではありませんが、観覧温室についてはリニューアルよりも新築が望ましいという意見が主な意見になっております。また、施設につきましても、植物園が、複合的な機能を

備えたハブ的な施設として、色々な機能を備えた施設である必要があるという意見がでており、これからさらに具体的な検討をしていきたいと思っております。

次に5ページですが、植物園のコンセプト案として、今後の植物園が行うべきこれからの研究をまとめております。その中で、京都府立植物園は栽培技術、園芸については、従来から研究をしておりますけれども、100年先を見据えて、植物多様性に関する研究を新たに打ち出していこうということで、このようにまとめております。その中でも、特に京都の植物については、重点的に調査分析し、データの蓄積をする。また、希少植物の栽培、技術を蓄積することで栽培手法の確立に努める。この希少植物というのは、海外の植物も含めた、栽培技術を蓄積するという事も含んでおります。そして、植物園の有する知見により絶滅に瀕している植物などを植物園で保全していく生息域外保全や希少植物の増殖、データの分析。そして、植物園ではできない機能、例えばDNA鑑定等については、京都は大学がたくさんありますので、大学との連携によって、研究を進めていく。そして地元で保全団体がたくさんありますので、そのようなところとも連携して、植物多様性の保全、ひいては生物多様性の保全と自然環境保護、保全に取り組んでいくという、そのような研究を進めていきたいと思っております。

そして概念図として書いてありますが、収集、調査分析、保存、そして栽培保全、これを植物園の仕事ということに位置付けております。そして、研究ですが、もともとあった従来の栽培技術は園芸も含めて進めていきますが、このような生物多様性保全については、論文にまとめて学会で発表するというよりも、府民へ還元として、生物多様性の保全を進めていくことで、京都府民への還元に向けた研究を進めていく。そのような、フィールドにしていきたいという意見にまとめています。

最後に6ページです。京都府立植物園の学際的研究拠点機能について説明させていただきます。京都府立植物園は従来から大学や研究機関と連携はしておりますが、ここをしっかりと見ていこうということで、議論しております。その中で京都府立植物園を取り巻いている、様々な機関がございます。この図を見ていただきますと、同じ北山エリアの中に、隣に京都

府立大学がございまして、そことの連携をさらに進めていく必要があると考えております。そして京都大学も、今まで通り連携協定を結んでおりますし、京都には動物園水族館があります。そことの連携も必要ですし、京都府関連部局として、特にレッドリストを管轄している部局がありますが、そことの連携もしっかりして、生物多様性、植物多様性の問題について、連携した研究を進めていこうということで、イメージとして掲げております。

最終的に府民還元として、このアウトプットと書いてあります色々な大学の持つる知見と植物園の栽培技術を通しまして、最終的には、生物多様性、自然環境の保全に向けた府民還元を進めていく施設として進めていこうということで、議論をしているところでございます。

<京都府>

それでは、最後の2枚をご説明させていただきます。7ページでございます。

今申し上げたような植物園内の議論、それから先ほどご説明いたしましたこれまでの委員の皆様方から頂戴したご意見。それから、利用者府民の方々のご意見を踏まえまして、京都府が考える府立植物園整備に向けた考え方を整理いたしました。

四つのこれまで申し上げている切り口ですが、栽培・研究・学習教育・魅力ということで、栽培については、植物園が植物園であるための根本機能だということで、これまで受け継がれてきた栽培技術をさらに維持発展させ、人材育成に繋がる取り組みを進めていく。2つ目の研究については、京都の植物多様性を守る学際的な研究拠点として大学等と連携して、栽培技術、植物多様性保全に対する研究を進める、そして成果をわかりやすく発信するというところで位置付けております。それから、学習教育ということで、すべての来園者に植物を通じた知的好奇心を育むということで、様々な世代に対して、年代、目的に応じた学びを選択できるオープンな科学の場を提供するという。それから、デジタルなどの新しい技術や手法によりまして、植物や植物園の魅力を伝えていく。また来園できない方に対しても魅力を発信普及するような取り組みをやっていくということです。そして最後、魅力について

は、京都の町中で多様な植物に触れ癒しを感じる空間。100年間培ってきました歴史を大切に、京都の植物や植物にまつわる京都の文化、こういったことを発信することで、府民が誇れる京都のシンボルとしての役割を果たしていきたい。そして利用者目線を徹底して、誰もが利用しやすい憩いの場を形成する。この四つの考え方をお示ししたいと考えています。

それを踏まえまして、栽培技術を継承発展させながら、植物多様性保全に関する研究機能を強化いたしまして、子供たちをはじめ幅広い世代が、自然環境や植物と人との関わり、こういったことについて楽しみながら学べる、生きた植物の博物館を目指すべきではないかということについて、お示しをしたいと考えております。

それを踏まえまして最後の1枚ですが、植物園整備に向けた施策の具体的な方向性になります。それぞれの四つごとに、課題、それからソフトハードの取り組みを示させていただきます。

まず栽培については、若手職員への技術継承が課題だということ。それからバックヤードの老朽化、コスト上昇、そういった課題がございます。そういう意味で、ソフト事業といたしましては、優秀な人材の確保や、学生インターンシップの取り組み、それから、バックヤードツアーの実施や植物園の魅力発信、さらには省エネ対策なんかの検討、こういったことです。それからハード整備につきましては、新しい栽培技術の発展を見据えたバックヤードの拡充・高度化。見せるバックヤードの整備などを挙げさせていただきます。

次に研究としては、府内絶滅危惧種の増加や栽培技術研究の情報発信が十分ではなく、研究に取り組む体制が未構築であるというような課題があります。こうしたことを踏まえ、大学等との連携体制のさらなる深化。地域ボランティア等と連携した府内自生地の調査や、植物採取。植物多様性の保全や研究フィールドとしての価値の上昇に取り組んでいく必要があると考えています。ハード整備といたしましては、標本庫や閲覧コーナーの整備。植物園が持っている貴重な資料である大森文庫をはじめとした資料や標本、研究成果が展示できるスペースの整備や、研究者と職員が交流できるような場、そういったものの整備を想定しているところです。

三つ目、学習教育機能ですが、世代やジャンルに沿った学習プログラムやデータが未整備な状況という課題があります。教育機能に対する認知度がまだまだ低いという状況。さらには、オリエンテーション等の機能なども未整備な状況であります。そういった学習コンテンツなどが不足をしていることに加え、観覧温室の老朽化や機能低下という課題がございます。そういうところに対し、ソフト的な取り組みとしては、学芸員的な人材の確保。それから、幅広い学習プログラムの作成。教育、福祉施設との連携。それから、生物多様性と学習に資する教育学習エリアの設置などが考えられます。それからハード整備については、常設展示室や特別展示室、観覧温室のリニューアル。さらに、先ほど利用者からのご意見でもありましたが、鳥の目の視点で植物が観察できるようなつり橋みたいなものが想定されると考えています。それから、ワークショップなどで学習できるような場所の整備も想定しております。

最後に魅力向上に向けましては、来園者がシニア層が多いという状況があります。それから、雨天時や夏冬の来園者が少ないということ。それから、施設全般が老朽化をしており機能低下しているということ。それから、ニーズにこたえた魅力的な情報発信機能がまだ不足している。若者、子育て世代のニーズに応じた施設整備が十分ではないということ。また、利用者にとって敷居が高いというような状況もある。以上のような課題が考えられます。それに対するソフト的な対応といたしましては、京都の植物や植物文化展示。植物に触れることができるエリアの設置、植物園の魅力向上に資するイベント展示の実施、こうしたことが考えられると思っております。さらに、想定されるハード整備ですが、ビジターセンター機能の設置、雨天時の大屋根広場等の全天候型施設の整備、場合によっては植物画のアートギャラリーみたいなものの設置。来園者の快適性に資する施設としてトイレ、授乳室、休憩室等の更新増設、魅力向上に資する例えばカフェスペースなどの設置、さらに整備にあたってインクルーシブなデザインの視点に立った施設整備が必要になってくる、こうしたことを想定しているところです。説明は以上でございます。

■京都府が考える府立植物園整備に向けた考え方

<岩科座長>

どうもありがとうございました。

それでは、まず最初は資料7ページになりますが、京都府が考える府立植物園整備に向けた考え方、これがコンセプトと言えるべき事柄ではないかと思えます。ここがしっかりしていないと各論には移れないと思えますので、この7ページですね、この京都府が考える植物園整備に向けた考え方に対して、委員の皆さんから広くご意見をいただければと思えますが、いかがでしょうか。

<田中誠二委員>

京都府立植物園が「生きた植物の博物館」を目指す中で、四つの柱でこれからの方向性が示されていますが、京都府がこれから植物園を整備するにあたって、広く世界に目を向けてこの施設をどのように開いていくのか、グローバルな視野、観点から京都府立植物園の発展の道筋が、表現されていけばいいなと思いました。

具体的には、例えば魅力の最初のポツのところ、「100年間培ってきた歴史を大切にし、京都にまつわる京都の文化等を広く世界に向けて発信する」というように、世界における京都府立植物園の使命・存在意義、或いはポジションを明確にすることも重要と考えます。

<岩槻委員>

コンセプトということで、少し批判的な言い方になるかもしれませんが、私この懇話会にお誘いを受けたときに、100年目の節目だから、京都府立植物園がこれからの100年にどう向かうということを考えると伺っていたものですから、それは非常に大切なことだと思って、本当は色々なところから手を引いておりますが、大切な京都府立植物園のことだからと思って、本日もリモートで参加させていただきます。なにか伺っていると、別に100年目でなくても、いつでも修正していくような話題が主になっていて、100年経って京都府立植物園は、

今からどう展開していくのかというような夢が見えてこないようで、ちょっと寂しいです。

例えば一般利用者の方との意見交換というのがあったんですけども、これは植物園のような機関では、どこでもいつでもやらないといけないことなので、100年目だからということではなくて、普段からそういう接触をやっておられると思うんですけども、これからも、こういうことを続けていっていただかないといけないと思います。

それから、植物園ということですが、日本では植物園と動物園とが並んで比較されることがありますが、これは第1回の懇話会でも申し上げましたが、植物園は英語で言えば botanical garden で動物園は zoo です。基本的に、欧米では植物園と動物園は違います。それが日本では植物園と動物園が同じように並んで話をされるようになっている。それにも関わらず最近動物園は、動物園でないといけないような研究が非常に進んでおります。それは、その動物園としての機能を維持するために必要だから発展していて、大学なんかでできないようなことが進んでいるというのがあって、むしろ日本では、国際的でもですが、植物園が遅れている部分があるように思います。ところが、日本の植物園、特に日本の植物園協会に所属している植物園はほとんど戦後にできた植物園です。それは、日本には、庭園機能は色々あるんですけども、公園機能のあるところ、例えば、ニューヨークでいうセントラルパークや、ロンドンでいうハイドパークというような、そういうパークがないものですから、それに代わるものとして戦後に出てきたものが、日本の多くの植物園です。ですから、名前も植物園と言わずに植物公園やフラワーパークという名前が使われていることが多いわけです。それはそれでいいと思うんですよ。ところが、今回、その先進的な植物園として国内で視察されたのは、植物公園ばかりです。植物公園が悪いというわけではありません。念のために申し上げますが、世界の代表的な植物園として、キュー植物園とアメリカのミズーリ植物園が挙げられますが、どちらも公園機能に非常に積極的です。例えば、キュー植物園は、もともと勅使門のような日本のものもありますし、戦後、最近になってからも、バンブーフォレスト（竹林）に日本の民家を移住させて、その公園機能を維持、発展させるというなこともやっておられますし、ミズーリ植物園は、レーブン園長が日本へ来た時も、一生懸命に

灯籠も品定めをしたみたいで、日本庭園というのをしっかり持っていて、公園機能も維持しようとしているので、植物園としては当然、公園機能というのは必要なんですけれども、公園だけでいいのかというと、植物園というのは botanical garden ですから、そういうものではない。先進機能として植物公園、新宿御苑も含めてですが、そういうところを視察されて、それに倣おうとされるのなら、むしろ京都植物公園にされるというものも、100年経ったからそうしようというのも一つの提案だと思いますが、そのような提案はされないんですよ。植物園として展開させようというのが、今7ページに現れている未来像になっているんですよ。そこら辺が、私はこれまでも議論させていただいて、いろいろ提案させていただいていることが、少し違ったのかなと思って、十分理解できないでいます。コンセプトとしては、京都の植物園というのは、7ページのようなものに肉付けした展開をするというのであれば、これからの植物園はいかにあるべきかということをもっと課題として提示していかなければならないと思います。それで、現在の植物園に求められているものを考えてみますと、求められているのは、今言いました公園としての機能を含めて、公園というような機能から生涯学習支援をするということが一つのテーマですし、それに合わせて、生きた植物を扱う、動物園が今、動物の繁殖や飼育についての研究機能を高められているように、生きた植物を扱う機関として、植物多様性に関する情報を、大学や博物館等の機関と、どのように協力しながら、明らかにしていくかということがあると思います。その意味でも植物園というのは、博物館関連施設なわけで、そのような意識を本当に持たれるのかどうかということが、これからの京都府立植物園のあり方に活かされてくると思います。設置のときにはそういう意図が非常に強かったと思いますが、100年間のいろいろな歴史の間で、必ずしもそれが十分に生かされてきたとは思えない。何度も言いますが、京都府立植物園、私が京都にいたころには、もう半世紀前になりますが、公園機能を非常に楽しませていただき、公園機能と同時に、植生の展示など生きた植物の博物館的な機能もその頃から楽しませていただいていたと思うんですが、それが100年経って、これからどう展開していくのかが、今、議論されるべきことじゃないかと思って、この懇話会に参加させていただいた

んですが、その辺は、いかがでしょうか。植物園側といいますか、行政側のご意見を伺いたいのですが。

<岩科座長>

今、岩槻委員から大変貴重なご意見いただいたんですが、それに対して、植物園、或るいは京都府はどう考えているのか誰かお答えいただけるでしょうか。

<植物園>

京都府立植物園ですが、四つのコンセプトをさらに深めていくということで考えており、植物園には研究型植物園や公園に特化した植物園、いろいろな種類がありますが、京都府立植物園としては、総合型植物園として、さらにこのようなコンセプトを深めていきたいということで、今回お示しさせていただいております。

<岩槻委員>

もっと具体的に申し上げたほうがいいかと思いますが、例えば研究機能として、前に申し上げたとおり、京都府立植物園は栽培ということに関してはすごい技量を持っておられるところで、これは日本の植物園をリードしている植物園といえると思いますが、これも栽培の研究をするということと言いますと、伝統的な技術をどんどん深めていって、後継者養成をされるということは極めて重要なことですが、これからの植物の育成ということに関して申し上げますと、今や時代は遺伝子に着目した系統保存、栽培技術というところになると思います。それをこの植物園の中だけで展開されるっていうのは、非常に難しいと思いますが、そのためには、やはり大学等の研究機関と強い連携を持って、これからの栽培技術をどう展開していくか、それは伝統的な技法を持っているところだからこそ言えることであって、むしろ大学の研究機関なんかは研究機関としての技術にばかり没頭しているところがありますので、それを野生の植物の栽培ということも含めて、京都府立植物園で持っている技量と

どう結びつけるかというような展開、それが今の時代には求められていると思います。そういうことに展開する機能を、どういうところと連携して、どう展開していくかというようなことが、100年経ったこれからの非常に重要なポイントだと私は思っていて、だから栽培技術の研究ということを前にも申し上げたことがあるんですが、言葉足らずだったかもしれません。そういう意味での100年目の展開というのを、ぜひご検討いただきたいということです。

<松谷委員>

私も植物園と公園と庭園とはどこがどう違うかの話をずっとしてきておまして、今も京都府立大学での3大学の授業では、まず最初にそういった議論をします。岩槻委員からコメントのあった公園については、いいんですけども、京都府立植物園が、京都府立植物公園と、そこに公園というのを前面に出しますと、今の日本の風潮ではちょっと怖いんです。そしたら、少しぐらいキャッチボールもええやろとか、三輪車入れろとか、そういう議論にすぐになってしまうので、京都府立植物園はそういう場ではないかと、現役の頃も今もそう考えています。植物園の緑も、公園や庭園の緑も同じ緑空間を形成する緑と言えるのですが、中身は全く違いますので、そこはやっぱり線を引きたいし、引いて欲しいという思いがあります。このコンセプトは、今後100年後も変わりなく続けていくのが、京都府立植物園の伝統と考えます。植物公園としてしまったら、核心に触れますが道が違うのではないかと思います。

また、岩槻委員から世界の植物園でキューとミズーリという植物園が出てきました。京都府知事も、府議会の答弁の中で、世界の植物園を目指すということで、ロイヤルキューガーデンズとミズーリ、そしてパドヴァの植物園を挙げられています。そのパドヴァの植物園は多分、公園機能が全くないと思いますし、8年前に、世界最新の温室を作っています。知事が答弁で、京都府立植物園は世界を目指して参りたいと考えると答弁されていますので、その世界の植物園のどこのいいところをとって、今回の整備計画に、こういうことをやりたいという思いで計画されているかということをも期待していたんですが、この7ページを見

ていると、それらの世界の植物園のいいところの何をどう取り込んで計画したいのかがわからないので、もしわかったら、具体的に世界のトップのここをマネしたいことを教えていただきたいと思います。

<畑委員>

全く一市民というか本当に素人の立場ですが、今岩槻先生がご指摘になったことと同じようなニュアンスを若干感じておりました。今回の資料を拝見して、ワーキングで先進地視察をされたというのはいいことで、他を知るといのは本当に大事だなと思いながら、なぜここを選ばれたかという説明が、非常に欲しいなと思っています。今、次の時代の京都府立植物園を考えるときに、なぜここを選ばれたのかということが知りたいと思いながら資料を拝見した時に、この新宿御苑ぐらいしか私は知らなくて、全部その植物公園となっていることがすごく気になっておりました。その点を今先生方がご指摘になっているのを聞くと、なるほどやっぱりそうなんだなあと、勉強しないといけないなと思いました。それで、先進地を視察されたのであれば、京都の植物園は何を視察に来て欲しいのかという、京都府立植物園の絶対的な存在意義ですよね。それがやっぱりこの次のコンセプトにはきちっと語られているべきだろうと感じます。そういう意味でも、今ご提示いただいている考え方というのは、悪くはないんだけど、そこが平準化されている、個性が全然出てこないなという気はいたします。

そういう意味で、京都府立植物園の次の時代を考えるのに、ワーキングで足を運んだのであれば、そして世界のそういう情報も、先生方からたくさんご提供いただいているのであれば、京都府立植物園は、だからここを目指すんだ、だからここを見に来て欲しい、視察に来ていただくだけの価値のある存在力の発揮できる植物園として、次の100年を目指したいというような、そういう迫力が求められているんだろうと感じます。期待したいと思います。

<角野委員>

角野でございます。今日はコンセプトということで、過去 100 年の歴史を踏まえて、次の 100 年、植物園が何を目指すかということを実際に共有しなければいけないと思っています。

それで、伝え方の問題なのかもしれませんが、まずこの 100 年間で、府立植物園がやってきて自慢できること、誇りにしていることは何なのかということ、まずはっきり共有すべきだと思います。その裏に、できなかったことというのも当然あるかもしれませんが、まずこの 100 年で何を実現したのか、そしてその上で、次の 100 年を考えるときには、それぞれ実現した項目に対して、それをこのようにさらに展開するんだというような言い方。或いはできなかったことを、ここをこのように変えるんだということ。おそらくそういうことを皆さんお考えですけれども、どうもその伝え方がうまくいっていないのではないかと思います。だから 100 年の歴史で獲得したこと、達成したこと、そしてそれを次の 100 年にどう変えるのか、或いは新しく何を目指すのかということ、例えばこの四つの柱でいかれるのであれば、その四つの柱について、過去できたことと、次狙うことというように、少し整理して考える方が、府民の方々にはわかりやすいのかなと思いました。

<水上委員>

水上でございます。今の角野委員のご発言の話の裏表になると思いますが、この整備プランがそもそも考えられるのは、つまり 100 年という時代が終わって、次の段階に植物園をどう整備していくかという話だと思うんですけども、その時に少し話が出ていたと思いますが、もし逆にこの 100 年で、この植物園の欠けている部分、それをどう捉えて、どう変えていくのかということが、整備の基本的な考えだと思います。

そうすると私が前も申し上げてきましたことが二つあって、一つはやはり総合型植物園と言われていますが、研究というのは少なくともほとんどされていないので、やはり植物園は生物多様性、植物多様性の解析と、それから保全を軸にした学術研究機関だと、京都府立植物園はその側面がほとんどないので、やはりその側面をきっちり作って、本当の意味での国際的な水準での総合型植物園にしていくというのが一つのポイントかなと思います。

もう一つは、前回もずいぶん若い方々へという話がありましたけども、これがあんまりこのコンセプトの中に入っていません。前回、教えていただきましたが、70%が無料入園者。京都府立植物園の場合、70歳以上と15歳以下が無料入園者で、かなり無料の幅が狭いんですが、それでも30%しか有料の方がおられないわけです。それで、もう少し考えてみますと、入園料は200円で、家族で子供2人連れていってもワンコインでおつりが来ます。温室まで見たとしても、千円札を1枚出せばおつりがくる。だから、あまりその入園料が、若い人、若い世代、つまり有料世代が来ない理由ではないと思います。だからその辺りをしっかりと分析して、次の100年を考えると、若い世代にどう魅力を発信していくかということが、非常に根本的な問題だと思いますので、それをもう少し考えないといけないと思います。この考え方を見ていると「子供たちをはじめ幅広い世代」とか、そういう書き方をされていますが、そうじゃないだろうと思います。やはり若い世代が大切です。高知の大学で講義を担当していて、確か1・2年生で200人弱ぐらいのクラスの講義に行った時に、ほとんどが高知県外の学生ということもあったので、高知へ来てから、或いは大学生になってから牧野植物園に来たことがあるかと聞くと、来たことがある本当に学生が少ないんですよね。何でそんなに来ないのかと聞くと、そもそも植物園というのは学校行事でいくところで、友達や恋人、家族で行ったりするところではないと思っている若者が随分おります。どうしてそう思うのかをさらに聞いてみると、そもそもお父さんお母さんと一緒に植物園に来て、子供の時に、楽しんだ経験があんまりないというんですよね。そのあたりを考えますと、家族が子供たちを連れて植物園で楽しもうというような、そういう魅力づくりをしていかないといけないし、家族がどこかへ行くというときに行き先を決める時、多分お母さんが大体行き先を決めると思うので、お母さんとかそのお母さんの予備軍になるような若い女性、そういう女性に魅力をどう発信していくのかというような視点が必要であろうと思います。これを見ますとそういうことをあまり書いておらずに、総花的に書いてもらっておりますので、これでは今岩槻先生が言われていたように、今までやってきたことをもう100年やるということだけに過ぎないんじゃないかなというように感じました。

<岩科座長>

総合型植物園という点では、日本でも数少なく総合型植物園としてやっているのが、水上委員が前に園長としてやられていました牧野植物園でもありますし、それから都道府県の経営という点では、もう一つは富山県立中央植物園だと思います。そういうところから水上委員に、今まで総合型植物園としてやってきて、良いところと悪いところ、いろいろ気がつかれておられると思いますので、そういうところからコメントをいただけますでしょうか。

<水上委員>

あまり直接的な答えにはなりません、一つは、設置者である高知県の理解がなかなか得られないということがあります。牧野植物園はミャンマーの植物多様性を研究テーマにしているのですが、何でミャンマーなんかやるのと、高知とどんな関係があるの、とかそういうこと言われて、植物多様性を一般的に研究し、それを社会に発信して、立派な評価を得ることが高知県のためになるんだという、そこにはなかなか繋がりません。理解してくれてる方だとは思いますが、そういう設置者の理解を得ることが難しいのが一つですね。

それからもう一つは少し関係ないんですが、私が高知に行った時に感じたのは、植物園というのは若者言葉で言うと意識高い系、それと高齢者の言葉で言うとハイソな人々の施設で、私たちには関係ないということも非常に聞きました。そのあたりの敷居をどう下げていくかということも一方で研究しながら、植物園の研究の意義を設置者に理解してもらいながら、しかしお客さんが来ないといいことを言っても駄目なので、来てくれる人の幅をどう広げるか、そのあたりに非常に苦労しました。

<岩科座長>

そういう点で言うと、研究色的な色彩がちょっと強くなりますが、私が園長をやっていた筑波実験植物園もある種の総合型植物園としてやっている形だと思いますけど、その辺、遊

川委員から何かご意見ございますか。

<遊川委員>

まず、資料を拝見していて、本日は議論のスタート時点ですのでやむを得ないところがあると思いますが、内容が拡散的というか総花的になっており、100年のビジョンが見えにくくなっている感じがいたします。

植物園の価値の大本というか、要石、キーストーンというのは、生きた植物のコレクションです。生きた植物でないとできない研究・保全・学習支援をどう発展させていくか。生きたコレクションが価値の大本にあるということを明確にするような文言がもっと前面に出てくると、いろいろな議論がしやすくなると思いました。

また、コレクションの大切さは、植物園、博物館、美術館のすべての共通した大本で、最近の世界の博物館とか植物園の議論で、「コレクションズベースドサイエンス」というコンセプトが非常に強く言われます。つまり、コレクションを利用した研究、科学の議論がすごく深められていて、植物園に関しては生きた植物のコレクションが、生物多様性の研究や保全、それから環境問題に対して、非常に重要な貢献をする事例が積み上げられています。生きた植物のコレクションの価値を再認識して、それをより知ってもらって、より使うということを推進するためにはどうすればいいかという議論や、どういう研究をすればいいかという議論、また、どういうふうになれば情報が共有できるだろうかという議論、こうした視点が大切です。

それからもう一つの視点は、コレクションを維持するコストの側面があります。生きた植物一種を管理するのに年間数千円コストがかかっているわけです。一種一種のコレクションのコストを回収するという視点からも、コレクションを眠らせておくということは非常にもったいないわけです。そのため、平たく言えば、コレクションを使い倒すというか、そういうことをもっと考えて、これからの取り組みを進めていく。それは研究もそう、保全もそう、学習支援もそうです。コレクションをベースにして、それをどう使い倒していくかという、

そのところが、とても大事なこれから 100 年の計画の素になるだろうと思います。

一つの例として、筑波実験植物園の場合、環境科学をやっている研究者がいませんが、国立環境研というのが近くにあって、その研究者が、植物園の温室の中の木から、どういうガスが出ているかということに興味を持たれました。東南アジアではフタバガキという木がたくさん生えています。フタバガキの仲間が塩化メチルという物質を特異的に大量に出しているということが、うちの植物園のコレクションを使った研究でわかりました。その塩化メチルがオゾン層破壊に関係しているということがわかって、それが科学誌ネイチャーの論文になったことがありました。ひょうたんから駒みたいな、こちらはそういう意図でコレクションを持っていたわけではないのですが、いろいろな連携を作ることで、植物園にこういうコレクションがあるな、それではこういう研究してみようという人が現れてくれば、それが非常にユニークな成果に繋がっていくことがあるわけです。ですから、そういう意味ではどのようにコレクションを使っていくかっていうこと、その道筋を整えていくということを進めていくことが大事だろうと思います。

<岩科座長>

私も 30 年来以上、植物園という施設の中で研究をやらしていただいたので、確かに研究というのがすごく大事だと、自負しております。ただ、園長を 6 年ほどやって、その前からも思っていたんですけど、一般の人はその研究とは全然関係ないところで植物園を楽しんでいるんです。なので、研究をやったということで、研究者がその成果をどんどん出したいという気持ちはわかるんですが、それがあんまり強く出すぎると今度は、一般の人ってあまりお勉強色が強いというのは嫌うんですよね。さきほどご意見がでましたが、植物園と言え、どうしても硬くなりそうな方向に考えちゃうというのは、そういうところではないかなと思います。

今のお三方は研究ということをやられてきた方向からご意見だと思いますが、そういう方向から少し離れて、他の委員の方々に何かご意見あったら、お伺いしたいと思います。

<角野委員>

植物の専門家ではございませんので、まちづくりや都市計画の中でのこの場所の魅力が何であって、それをどう活用すべきかという視点でお話したいと思います。

まずこの植物園の立地というのは、この京都の北部、しかも旧市街地でいうと縁辺部にあります。大変いいところにあると思います。最大の財産は、やはりこの賀茂川の流れがすぐ横にあって、それから東側には比叡山。借景に取り込むことも十分可能な美しい山ですし、たまたま私は南の方から今日は歩いてきましたが、この時期、本当にこの景色、賀茂川から見た植物園の緑の塊というのは素晴らしいですし、逆に植物園の側からの、その賀茂川との関係性というのは本当にすごく得をしているなと思います。ですので、この立地条件をもっと最大限に活用していくとすれば、そういった中でも特に私は水の流れ、さらにこの上流からここを經由して、下流の市街地の方に繋がっていくという中での植物の変化であったり、或いは、鳥や昆虫や水生動植物等の繋がりが、実は植物園の中だけじゃなくて、外でも見ることができる。だから、その繋がりが新しい植物園の計画の時にも、どう繋げていくのかというところに、いろいろ工夫をしていただきたいなと思っております。それが他の植物園には見られない、この京都市のこの場所に立地しているということの魅力を最大限に考えていくきっかけになるのかなと思ってます。それで、あとはどう繋げるかと考えたときに、風景としてどう取り込むかとか、それから例えば特に賀茂川とは、しょっちゅう出入りできるようなこと、植物園のサイトの中に行って、ちょっと外に出てみようかとか、また戻ってみようかというような、そういう行き来ができること、ここ府立植物園の使われ方が、もっと楽しくなるといいですか、使われ方にバリエーションが出てくるのかなと思っておりますので、そういった視点からもちょっとお考えいただきたいなと思います。

<石川委員>

今のご意見に私も同じようなことを考えておりました。京都府立植物園は非常に立地条件

に恵まれている場所だと思います。それで、まず今おっしゃられたように、隣に賀茂川が流れ、それから比叡山が眺められる場所があり、そういうことを、これから、国内外の観光客に、もっとアピールしていいんじゃないかなと思いました。海外の植物園に行っても、思いがけず、その地域の立地条件が見えるところがあります。例えば、オランダのライデン植物園では、植物園を見学した後、最後に広い芝生があって、そこに運河が見えます。思いがけずに運河にボートが行き交うところが植物園側から見え、また、運河でボートに乗ってる方たちからも植物園が見えるというのも楽しい、こういう立地条件に恵まれているところがあるんだなと思いました。もう一つ、この間、南アフリカのカーステンボッシュ植物園に行きましたが、そこはバックにテーブルマウンテンが見える雄大な植物園なんですけども、とても立地条件に恵まれていて、京都府立植物園もそういうところをもっとアピールするのではないかなと思います。

実際に私も今年の春にこちらを見学させていただいて、ちょうど桜が満開の日でしたので、植物園の美しい桜も見ながら、賀茂川の桜も楽しむことができましたので、観光客にとっては、とてもうれしいことだと思います。

<岩科座長>

立地条件という点では、私、協会の会長やっていて、全部行ったわけではないですが、おそらく植物園協会に入っている植物園の中で、ここ京都府立植物園が立地条件という点では、まさしく完全なトップだと思います。特に、筑波実験植物園や、それから水上先生が園長をやられていた牧野植物園に比べると、この立地条件の良さというのはいくらやましい限りだと思います。これを利用しない手というのはないということは、確かだと思います。

大分時間が押していますけども、先ほど岩槻先生の方から出た、今回のいわゆるコンセプト的な方向ですが、ちょっとそう総花的だという意見はございました。確かに、言っていることは、僕は少しも間違っていることはないとは思いますが、やはり、これにもう少し肉付けした方向で、コンセプトをまとめていただければいいのかなというのが皆様方の意見では

ないかと思います。それから、総合型植物園的な方向を目指すという点では、さらに皆さん意見はいかがでしょうかね。

<岩槻委員>

先ほど申し上げたのが、総論的なコメントなので、もう少しそれを具体的に肉付けした形で申し上げようと思います。これからの京都府立植物園に期待したいことを率直に申し上げますと、植物園が今当面している課題としては生涯学習支援と環境問題への対応です。

生涯学習支援に関して言いますと、確かに、角野先生もおっしゃっているように、ここは非常にいい立地で、せっかくのいい立地を活かして、ここへいろんな人に来てもらうということも大切なことですし、ついでに言うておきますと、行政としてはここへ多くの人に来ていただいて、入園料が増えないといけないのかもしれませんが、それだけではなしに、このせっかくの魅力を、やはり世界に発信していくということを、植物園の重要な柱にされているわけで、前にも申し上げたとおり、広報活動、特に、今や電子機器を用いて、今私も20年前には考えられなかったような出席の仕方をさせていただいておりますが、そういう技術を使って、京都府立植物園の魅力を世界に発信するということは、結局は、観光で来られた方を植物園に惹きつける力になると思います。今でもホームページみたいなもので取り組んでいると言われますが、ホームページみたいな片手間でやるような仕事ではなしに、これに専従する部門を育てて、積極的な発信をしていかれるということが必要だと思います。

それから、博物館的な機能から言いますと、植物園に来てくださりだけではなしに、人と自然の博物館の経験からも思うわけですが、積極的に出前授業をやらないといけないと思います。特に、小中高校なんかとの連携は、学校の団体に来てくださりだけではなしに、積極的に出て行って、植物の魅力を伝える。そうすることで小中高校生が植物園へ訪ねていこうというような気持ちを盛り上げることが重要で、これまでの経験からも積極的に効果があることで、そういうことをやっていかれる必要があると思います。それを含めて、前に研究者か学芸員かという話がありましたが、これは私の経験から言うと人の問題であって、優れた

研究者が本当にすぐれた生涯学習支援者になることもありますし、学芸員でそういうことには全然役に立たない人もいます。それはその人の話なので、優れた研究者でもあり優れた学芸員でもあるような人を、どのようにオンジョブトレーニングで育てていけるかという職員の育成事業に力を入れることも重要です。これまで、植物園関係は人は勝手に育ってくるというような、技術の伝承はやったんですけども、本当に優れた生涯学習支援者を育てようということはしてこなかったと思いますし、そういうことにも力を入れていただきたいと思います。

それと同時に、この前も申し上げましたが、スタッフでない協力者。NPO等で植物園をお手伝いしてくださる方と、いかに連携をするかが、これからの生涯学習支援にとっては、不可欠なことだと思いますので、それをぜひ進めていただきたいと思います。人と自然の博物館は、それが非常に有効に機能しているので、先進的な博物館というのなら見ていただいた方がいいんじゃないかと思います。

それから環境対応に関しては、すでに何人かの方がおっしゃったみたいに、生物多様性ということに繋がってくると思いますが、これも一つは、先ほどから申し上げた栽培技術を研究と結びつけるということで、いかにこの遺伝子資源、系統の保全に協力するかを、植物園協会全体が今やっておられますが、京都でも、せっかくの技能を活かして、充実していただくということが必要だと思います。それから、生物多様性そのものの情報の構築と発信に関しては、この前も戸部園長が大分強調されましたが、これは京都府立植物園でやるとすれば、近くにある京都大学に立派なハーバリウムがあって、それとどのように呼応しながら、京都府立植物園はそういう情報の構築と発信を、京都府立植物園らしく作り上げていくかという具体的な案を出していただきたい。生物多様性に関する取組については絶対に植物園としてやるべき不可欠な事業だと思いますが、ただ、今までもやればよいと言って、簡単なハーバリウムを作って、人もつけなかったら何もなくて無駄になってしまったというようなことがあるので、本当に実現できるような企画として、せっかくの100年目ですから、府立植物園、公立植物園としての事業として、世界をリードするような、そういうプロジェクトをぜひ具

体的に構築していただきたいというふうに希望をします。

<岩科座長>

今日、いろんな委員の皆様から、具体的なことも含めたいろんなご意見出たと思いますので、それを含めて、最後、コンセプトとして、京都府の方でまとめていただければいいのかなと思っております。

■具体的な整備の方向性について

<岩科座長>

コンセプト的なものは完全にまとまったわけではありませんが、それを受けて、植物園整備に向けた具体的な方向性、資料では8ページになりますが、これについても、議論を進めていきたいと思います。8ページには栽培、研究、学習教育、魅力、それから課題、実施すべき取り組み、想定されるハード整備と具体的な方向が書かれてあります。どれでもよろしいかとは思いますが、委員のみなさんに、これについてもご意見をいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

<水上委員>

先ほど申し上げた関連で発言させていただきますと、この研究のところですが、課題に植物多様性の保全に関する研究に取り組む体制が未構築と書いてあって、それを構築するのかということになるんですけども、実施すべき取り組み、ハード整備を見ますと、研究体制というのは、基本的に研究員、つまり人と、それから研究施設、すなわち研究室と、研究資金、つまり研究費だと思うんですけども、この三つを作る、確保するという話は全くなく、例えば、植物多様性の保全研究フィールドとしての価値の向上、要するに、よその研究者、連携機関の研究者が、ここで保全などのための研究をするためのフィールドとして活用してもらおうということで、さらにそれとは裏返しだと思いますが、ハード整備を見ますと、研究者と職員が交流できる場所の整備、自前の研究者がいればこんな場所は必要ないと思うんですけど、これを書いているということは、要するに外部の研究者が、研究者以外の職員と交流できる場所の整備と書いてあって、最も重要な人、研究設備、お金については、実施すべき取り組みにも、想定されるハード整備にも書いてないというのは、ちょっとどういうことかなと最初にこれを見て感じました。

<岩科座長>

どうもありがとうございました。私も後で意見を言おうと思っておりましたが、研究面を充実するというのは私も賛成ですが、いろんなどころ見ていると、特に都道府県、或いは市が経営するような植物園、博物館とか、その他の施設もそうですが、一番恐れているのは、こういう方向を進めるのはいいことですが、首長が変わったときに、往々にして次の方はそれを認めないということ、いろいろなところで見してきました。要するに、作ったのはいいですが、途中で階段を外されるというのが一番恐れているところで、今、水上委員の話がありました、そういうその先の具体的なところがはっきりしていないと、言ったはいいけど、本当にそれを続けることができるかどうか。継続は力で、やった以上は続けないと意味がないと思っていますので、それについては、確かにもう少しその辺りの具体性があったらいいなとは思っています。

<畑委員>

この具体的な方向性にいろいろ書いている中で、学習教育の想定される項目の一番右に、常設展示室、特別展示室とあります。もちろん大事なことだと思うんですが、この植物園の限られた空間の中で、こういうものの充実がどこまで本当に可能なのか、中途半端になるのが一番怖いな、と読みながら思いました。例えば、こういうものは別にこの植物園内だけで考えずに、もっと植物園から外へ出て、一般市民の生活空間の中で、京都府立植物園が、ぜひみんなに見て欲しいというような展示スペースや展示運営があってもいいはずだと思っています。実例として、いつも気になるのは東京駅の丸の内にある東京大学の博物館です。無料で常にパブリックにオープンされており、とても面白いんですよ。本当に博物館の中に飛び込んだかのような、あんなものが東京駅の駅前にあるというのは、私はすばらしいといつも楽しむわけですが、例えば京都駅のどこかとか、ものすごく気楽な発言をしますけど、京都市立芸術大学が、今、移転を具体化されており、京都駅の鉄道のレールとの間の空間のスペースをどう活用するかみたいな話が、新聞紙面に出ておりました。例えばあのような空間なんかを、もっとパブリックに、こういう目的のために運用していく可能性があるんじゃない

いかなと思います。希少植物の育成栽培は先ほどのコンセプトにもありましたよね。その希少植物の育成栽培をしてもらって、それを日常生活の中で見せていただくアウトプットが欲しいととても私は思っています。実は私の小さな会社の中でも、温室とか、その周りで植物の栽培をやっていて、結構、京都府のレッドデータの植物を鳥丸通りで展示させてもらいますが、立ち止まられる方や今年も咲いたねって言って声かけられる方がたくさんおられます。だから植物園の中だけで完結を考えられるのではなくて、植物園が持たれるコンテンツ力が外へ出ていく可能性もぜひ、議論のどこかに常に置いて欲しいと思っています。

<田中安比呂委員>

専門家ではありませんので一市民として大変恐縮ですが、今のお話の中で、この下で展示会をよくやられていまして、以前、蘭の展示等があったときにお邪魔したところ、お花の相談ができるコーナーがありました。家庭で今、庭があるような家も少なくなっていますが、素人がちょっとした植木を育てるとき、何かがあったときに少し相談できる、教えてもらえるところがあると非常にいいと思います。そういった意味で、例えば土日に、職員の方は大変だと思いますが、色々な植物の育て方相談室みたいなものがここにあることによって、花を育てている方が、このような状況だけど原因は何だろうとかを簡単に相談出来るような施設が、土日だけでも一部でもしていただけると、一般市民の方にとっては、繋がりがもっと深くなってくるのではないかと思います。

それと、大変これは難しいことでしょうけど、先ほど植物公園という話が出ました。公園というイメージが少し難しく、あまり公園的な植物園というのではなくて、やはりここは、希少植物を育てていく、研究をしていく、そういったところが必要ではないかなと思います。当社は上賀茂神社ですが、一般の神社と違い、一の鳥居から両側がずっと芝生になっておりまして、毎日近くの保育園、幼稚園の子が必ず来てくれて、芝生で走り回って遊んでくれているんですね。私はそれが大変大切なことだと思って、いわゆる犬なんかは一切入れるのを禁止しています。というのは、子供さんが芝生で転がりまわって遊んでいるところに、

例えば犬の糞が一つでもあれば、やはりこれはまずいことだと思いますから、かといって、もちろん鳥や鳥は来るので、必ずしも芝生が全く綺麗というわけにはいかないのでしょうけれども、今、子供さんたちが、そうやって自然の中で触れ合って遊んでもらえるようなところというのは、大変少なくなってきたのではないかというように感じます。そういう意味において、府立植物園は、もっともっと子供さんたちに触れていただき、遊びに来ていただき、芝生で転げ回っていただくような、そういったところが大変必要ではないかなと思います。

先ほど委員の方がおっしゃられたように、確かにここは賀茂川もございますし、景観もすばらしいところです。今の若い方は、例えばスターバックスのような喫茶店でパソコンをかなり長時間いじっているような子がありますが、こういった自然の中で勉強をした方がもっと頭に入るし、勉強になるのではないかと思っています。そういう多くの市民の方が、大いに来てもらえるような方法を考えていただく必要があるのではと思います。そういう方がここに来て、ペットボトルの紅茶でもコーヒーでもお茶でも飲みながら、こういった芝生の中で、パソコンをいじるような、そういう子が多くいるような広場みたいなものがあったとしても、すごくいいんじゃないかなってというような感じがしてなりません。一市民として、専門的なことが言えず恐縮です。

<岩科座長>

ただやはりここは植物園で、一般の人が入るわけですから、中から見る目というより、一般の方が外から見る目、これは非常に貴重なことだと思いますので、大変な貴重なご意見だと思います。その他何かございませんでしょうか。

<松谷委員>

世界レベルの植物園を目指して参りたいということですが、世界レベルの植物園といえる根本は、先ほど遊川委員が話されたように、世界の生きた植物をコレクションし続けること

と、税金で導入しているものなので、枯らさず生かしたまま栽培し続けることが、植物園としての大きな使命、本質であります。それはもうずっと 100 年前から根本的な京都府立植物園の運営方針だと思うんですが、それをさらに今後 100 年目指していくならば、少なくとも、その導入した植物が今どこにどんな形でどういう状態であるのかという、そういう導入植物栽培管理の一元化システムみたいなものをデジタルで備える必要があると思います。ロイヤルキューガーデンズでは 20 年ぐらい前に既にやられていますし、この木を見たいとスタッフに伝えて、コンピューター上に学名を入れたら、地図上にぱっと出てきて、園内のここにあるということが即座にわかります。また、その木の一本一本を別の画面で見たら、その個体はいつ何年どこから誰が導入してとか、そういうシステムがちゃんと出来ていますので、そういうのも、京都府立植物園には整備して欲しいと思います。それが、今のスタッフで出来ればいいのですが、今のスタッフがそれに専念すると、本来しなければいけない栽培ができませんので、そういうことをするのであれば、先ほど、岩槻委員がおっしゃいましたように、専任のスタッフが必要です。体制の整備問題もでてきます。しかし、そういうことにしっかりと取り組むことで、初めて世界というものが見据えられてくるのではないかと思いますので、人、物、金は絶対大事なものになってきます。

<石川委員>

学習教育のところですが、先ほど少しお話ししましたけれど、この秋に南アフリカのカーステンボッシュ植物園、イギリスの王立キュー植物園、同じくキュー植物園が運営しているウェイクハーストを訪れました。そして、この三つの植物園では、必ず子供たちが見学しているところを目にしました。日本の場合、植物園に子供が来るということになると、学校から遠足形式というイメージがあり、リュックを背負って水筒を持ってというイメージが、私の中にはあるんですけど、ここの三つの植物園では、そういうものを持たずに、皆パンフレットと筆記用具を持ってきていました。引率の先生、多分教師だと思いますが、植物の説明をして、それに対して子どもたちは植物を観察して、一生懸命にメモをとっている場面も

何回か目にしました。例えば、キュー植物園では、教師のための教育もしているということで、植物園と地域なりそれから学校なり、多分、かなり連携をとって、そういうプロジェクトをやっているのではないかと印象を受けました。

一つには、先ほどからお話が出ていますように、植物園を楽しむっていうことはものすごく大切なことだと思っており、これからも引き続き重要なことだと思いますが、一方では、地球温暖化による地球環境の悪化もありますので、植物はどれだけ地球にとって大切だということ、これは子供たちに学んでいただくということになると思いますが、植物園でいろいろな植物を観察しながら学習するというのも大切な時代になってきているのではないかと非常に感じています。21 世紀の教育に、こういうことを盛り込んでいただくというのも一つの方向かと思えます。

カーステンボッシュ植物園では子供たちが植物を観察した後に、広い芝生があるエリアで、ただただゴロゴロゴロゴロ、全員が制服を着たまま転がっており、非常に楽しそうにしていました。学習しながら一方にはそういう楽しみがあって、制服のままで転がってみると、多分、草の匂いもするでしょうし、空の見え方も違うでしょうし、それこそ芋虫の気持ちになったような経験もできるのかなというように思いました。

キャノピーウォーク、鳥の目視点という項目もありましたが、カーステンボッシュとそれからキュー植物園の鳥の目、キャノピーウォークに行ってきました。カーステンボッシュは雄大な景色がバックにあり、テーブルマウンテンが本当に目の前に迫っていますので、その雄大な景色を楽しみながら、植物園の樹木も観察できます。キュー植物園の方は、テンプルトハウスなど、美しい温室なども眺められて、非常に楽しむことができました。また、キュー植物園では、階段の横にエレベーターが設置されておりまして、今年それが使えるようになるという記述がありましたので、もしかしたら今頃、エレベーターが始動して、どんな人でも登れるようになり、鳥の目の状態で植物園を楽しんだり、それから樹木を観察したりすることができるようになってきているのだと思います。

もしも府立植物園で、この鳥の目のキャノピーウォークを作ることが実現したら、100年

の歴史がある樹木をたくさん持っていらっしゃいますので、そういう場所に設置するとともに、さらにできることであれば賀茂川が見え、比叡山が見えるような場所を新設していただけるとすごく楽しいのではないかなと思います。それで、もしさらに付け加えるのであれば、100年の歴史がある樹木のストーリーを伝えて、さらにその樹木とポリネーター（花粉を運ぶ昆虫や動物）との関係なども解明していただけると、植物を見る方に、とても興味を持っていただけるのではないかなと思います。キャノピーウォークそのものは、熱帯雨林の観察のために、高い木の間につり橋を渡してその森を観察するためにできたと聞いております。実際に、熱帯雨林をキャノピーウォークから見ると、周囲の森を観察する事が出来、素晴らしい景観を見ることが出来ますので、もしそういうことを実現していただけると、より魅力が高まるのではないかなと思います。

さらに、もう一つだけ付け加えさせていただくと、植物画等のアートギャラリーの設置ということの魅力のところに書いていただいております。今、各国の植物園で植物画を取り上げていただいております、大変活発な活動が行われています。実際にシンガポール植物園で、アジアの4ヶ国のソサエティーが協力して、東南アジアの植物を描いた展覧会が今日から始まります。多くの展覧会が美しく植物を描いた作品を展示するというだけでなく、環境問題と連動して、絶滅危惧植物だったり固有種植物だったり、それから固有植物とその地域のポリネーターとの関係などを盛り込んだ、地球環境と連動した企画になっております。もしそういうことで、さらに植物の魅力や地球環境を考えることに貢献できる機会を作ることができると、とても嬉しいなと思います。

<遊川委員>

なるほど、こういう気づきがあるなど、資料を面白く拝見しました。4点、コメントします。一つは人的資源の整備のことで、方向をなかなか明言できないところだということはいく承知の上ですけれども、植物園そしてコレクションを生かすも殺すも人次第なわけです。やはり植物園専従の研究者、学芸員がいないと、今の資料で出しておられる事業のスケールに

は対応できないことは明確だと思います。それを外部との連携みたいなことだけで、本当に実現できるのかというところをまず真剣に議論すべきところだと思います。最悪のシナリオは、立派な計画を実行する人がいなければ、虻蜂取らずというか、今現在の植物園のスタッフで、いろいろな機能をすべてやっていかななくてはならなくなることだと思います。そのようになってしまった植物園というのが、あちこちにあります。そのような問題が起こらないように、今の時点でこの人的資源のことをしっかり議論しておく必要があるというのが一点目です。

それから二点目は、前回の有識者懇話会で、京都という地域の価値を引き出すことを強調しましたが、一方でグローバルの視点も大切で、地域と世界との両方を大切にすることがこの植物園の将来にとっては、あるべき姿かなと思います。というのは、府立植物園は日本だけではなくて、世界の貴重な植物も保有している。どちらも貴重な資源ですから、ローカルな視点とグローバルな視点、インバウンドという観点もありますし、両方をきっちり出していくことが大事だろうと思います。

それから三点目は、前半で生きた植物のコレクションと言いましたが、もう一方でミュージアムとしてのコレクション、資料では例えば大森文庫であったり、もう一つアートギャラリーという構想も出ておりますけれど、こうしたアーカイブ機能のことです。実は植物や園芸に関して、日本の国内できっちりとしたアーカイブは一つもありません。園芸、植物関係の古い資料、植物画などを体系的に保存して、それを利用できる場所というのは、一つもありません。たとえば個人所有のコレクションの中に非常に重要なものがあるのですが、そういうものが散逸している状況にあります。そういう意味では、この構想の中にあるギャラリーのようなものは、アーカイブとして展開するという視点があるかなというふうに思いました。

あともう一つ申し上げますと、計画の中で友の会や植物園ボランティア等の植物園を大切に思って応援してくれている皆さんと、今後の取組の中でどのように一緒に植物園を育てていくかももう少し位置付けとして明確にしていくといいのではないかと思います。

<染川委員>

いろいろと思うことはありますが、絞りますと、例えば、「実施すべき取り組み」の下から二つ目の項に「独創的で目を引く植物の展示」があります。今までにも多くの展示を手掛けてこられたと思いますが、インタープリテーション（分かり易く人々に伝えること）できているかが重要なポイントだと考えます。

昨日は、当園のバックヤードも合わせてご案内くださり、植物の様々な魅力を発見しました。一例を申し上げますと、正面入口近くに期間限定の花壇が二つありますが、そこになんとパパイアの実が鈴なりでした。そのような姿は、私としては外国や沖縄でしか見たことが無かったので、温室ではなくて京都の屋外でパパイアが育つと知り驚きました。職員の方にお尋ねしたら「実はこの花壇は、京都の夏は熱帯というコンセプトなんです」とおっしゃったんです。でもその解説はどこにも書いてありませんでした。ご説明を聞き、気候変動などにも思いが及びました。こうしたことを上手く来園者にインタープリテーションできれば、憩いと学びの場としてさらに機能すると思います。職員さんに一つ一つの話聞いていくと、魅力的な植物であふれているので、それをどのように伝えていくのかということがとても大切ですし、また組織として実行可能な体制をどのように作って行くかを同時に考える必要があります。

先ほど、コレクションベースドサイエンスという言葉が出てきましたが、私の専門であるミュージアムエジケーション、博物館での学びの方面から申し上げますと、オブジェクトラーニングという言い方があります。学校はカリキュラムが決まっています教科書に沿って勉強します。しかし、オブジェクト、モノからどう学ぶかの力を育ててあげるのが、生涯学習施設であるミュージアムの役割の1つと言えます。現実社会には教科書は無いので。ですから、先ほどのパパイアの話もそうですが、植物との出会いが突破口として、来園者が自力で深めて行けるようにするには、どういうサポートが必要なのか。やはりコンセプトやそれに見合った組織作りを十分に練ることが望まれます。

現在実施されている毎木曜日の職員さんのワークショップを継続し、詰めて行かれると良いのではと思います。ちょうど文化庁が今年度中に京都に移転してきますので、文化庁の補助金等にも応募して予算措置をし、なるべく職員さんの負担を減らす形でプロジェクトに発展させるなど、大変とは思いますが挑戦してみてもいいのではないでしょうか。

また、バックヤードで奄美大島や対馬の希少種を育てて日本の植生に貢献されていますが、植物の実物は見せられなくても解説パネルや体験型の展示手法を駆使して紹介する展示も作れますので、社会の中での植物園の重要性を来園者に理解してもらうためにも、積極的に進めてもらえたらと思います。

<岩科座長>

確におっしゃる通りで、これはどこかで私も話したことがあるかもしれませんが、動物って勝手に動いてくれるから、それだけで見ていたら楽しいんですが、植物ってよほど綺麗な花でも咲いてない限りは、なかなか、注目してくれないですね。だから、植物といえば、どんな地味な植物もあるんですけど、そこにうんちくが少し入ると、へ～、になるんですね。その、へ～、というのを、捕まえられたらもうこれはベストです。ですから、いろんな国とか地域に行って、その植物園で植物を見ると、その国や地域の文化程度がわかるというのはそこだと思っています。

京都というのは、他の植物園がうらやましいくらい、京都という名前で、社会的なイメージがありますから、これを使わない手はないので、これを使って、さっき染川委員がおっしゃったような、いろんなところにうんちくを出していってもらえれば、もっと魅力的になるのではないかと確かに私も思います。皆さん他に何かご意見ございませんでしょうか。

<角野委員>

この右側に想定されるハード整備としていろいろ出されましたが、なかなかこれだけではイメージが湧かないんですね。どれぐらいのボリュームになるだろうとか、それから、そ

れらをどのように配置されたり、そこの空間的なイメージを持ちずらいのですが、その中で、例えば大屋根広場ですが、要するに雨天対応と暑さ対応、これはユーザーの方も大変おっしゃっていて、おそらく、例えば遠足とか、そういった時にはかなりまとまった人数が入らなければいけないということで、こういうことをお考えだと思うんですけども、ある程度は必要だとは思いつつも、例えば植物園なので、ちょっと雨宿りができるような、ちょっと木陰の空間とか、或いは東屋的な装置。だから、フォリー（西洋庭園等にある装飾用の建物）とかいうレベルでのそういった対応といったものも、一部でお考えいただくと、それはランドスケープの修景の要素にもなりますので、植物園ならではの木陰、雨宿り対策というのも工夫できるのかなというのが1点思いました。

それから、それ以外に例えばビジターセンターとかは、ここが植物園として成立していくためには、おそらく不可欠なものだと思うんですよ。それから、ギャラリー的なものがあったらいいねという話なので、それらが実際にどのように配置されるのかというところの議論を、ぜひさせていただける機会を作っていただけると嬉しいなと思います。

<畑委員>

皆さんのお話を伺いながら、思い出したことがあります。先ほど石川委員も話題にされたことですが、子供達が学校の先生に引率されて植物園に来たときに、その先生が説明するのではなく、植物園の教育担当者が関わってあげるようにする必要があると思います。海外の美術館や博物館には、教育プログラム担当者の部屋があって、そこにはボランティアの人たちがとても誇りを持って参画しておられます。府民の中の本当に植物が好きな人たちが語り部として次の世代に語りかけてくださるといふ植物園が機能すると、とても楽しくなると思います。これが機能すると、プロパーの専門の職員の方々が専任すべき仕事に注力できますし、染川委員や石川委員のご指摘の点も同じことではないかと思えます。

<水上委員>

先ほどコンセプトのところですべての世代と書いて、若い世代にあまり焦点当ててないと言ったんですけども、今これを読むと、魅力のところは、非常に若い世代、若者子育て世代のニーズに応じた施設整備が不十分と書いていただいている、想定されるハード整備のところでも例えばトイレとか、カフェとか、そういったことを書いていただいているので、やっぱりちゃんと見ていただいているなと思直しました。

ただ先ほど言われましたように、この大屋根広場とかは少しどぎついなあと言う気もしますが、今後、全体でいろんなものを作っていく中で、やはり植物園景観というようなものを、守っていくというか、現在の景観とどのように統一性をとっていくのかということが非常に重要だと思います。植物園のランドスケープの専門家も多くおられますので、そういった方の意見も今後十分聞きながら、もちろん園の意見も聞きながら、取り組んでいくことが必要かなと思いました。

<岩科座長>

私が気になったのは、栽培のところ、「ベテラン技術職員の大量退職を控え、若手職員の」というのがあるんですけど、多かれ少なかれ、日本中の植物園で一番問題なのは、技術職員が来てもらってやってもらうんですけど、筑波実験植物園もそうなんですけど、どこも3年縛りと5年縛りの非常勤枠があって、せつかく5年間でやっと一人前になったとたんに辞めなければいけないという状況が、今、地方の植物園ではあるのではないかと思います。本当にいつも思っていることなんですけど、本当にやっと一人前になった途端にいなくなるというところを非常に危惧しているところではありますが、京都府立植物園では、どのような体制になっていますか。

<植物園>

府立植物園の場合ですが、京都府職員が直営で運営しておりますので、3年とか5年という縛りはありませんが、年齢は偏ったりしております。

<岩科座長>

それは他の植物園からすると、本当にうらやましい限りだと思います。経験というのは金で買うことができないので、是非ともそれは維持していただきたいとは思っております。どうもありがとうございました。

それでは、いろんな意見も出ました。ちょうど12時ですので、今回の有識者懇話会、これで終わりたいと思います。

■京都府事務連絡（次回以降の進行について）

<岩科座長>

それでは最後に、次回の懇話会に向けたスケジュールについて、京都府から説明をお願いします。

<京都府>

次回の懇話会につきましては、本日のご意見を受けまして、京都府で整理いたしまして、後日、日程も含めまして連絡させていただきます。

■戸部園長閉会挨拶

本日は第3回有識者懇話会の開催にあたって、本当にどうもありがとうございました。たくさんのご貴重なご意見いただきました。

本日、資料として出された植物園のあり方とか、施策の具体的方向性というのは、前2回の懇話会で委員の皆様方からいただいた様々なご意見に、職員の意見や利用者の意見などをくみ上げて、全体としてまとめ上げていったものです。その中でも、植物園内ではその職員が中心になって、第2回懇話会から今日の第3回懇話会の間に、短期間ではありましたが、非常に熱心にワーキングやプロジェクトチーム会議を開いていただいて、まとめ上げてきたということがあります。その意味では、職員全体で同じ方向を向いて、検討を進めているということを私自身、非常に心強く思っております。

その一方で、現在の植物園の研究教育というのは非常に不十分な点もあります。皆さんからご議論いただいたコンセプトが、きちんと実現されれば、それによって府民や利用者へのニーズを満たすものとして、植物園の整備が大きく前進するものと考えられます。そのためにも、今より深めなければならない議論が、まだまだたくさんあると思っております。

あまり言いたくありませんが、行政ではこうした整備計画というのは、実施方針を決めても、実現に至らないことが多々あります。しかし、実現に向けて、体制の確保を含め、着実

に議論を進めていかなくていかなければならないと思っております。特に今後取り組むことになっている生物多様性の解析や保全に向けた研究については、植物園を中心とした具体的な研究体制のあり方、その構築がさらなる課題なのかと思えます。

あと本日、皆様のご意見を伺いますと、とりわけ、他の研究機関などの連携が、非常に重要だなということを今改めて強く思っているところです。それについては、当事者或いは第三者も含めて、あるべき研究体制の形とか、望ましい体制の形を議論することが必要かなと思っております。

今、京都府のみならず、昨今の世界情勢を見たときに、研究のような取り組みは何としても実現しなければならないと思っております。どなたも耳にされたことであろうかと思えますけれども、2015年に国連サミットで採択されたSDGsというのがあります。これは15年かけて、その間に達成されるべき持続可能な発展目標として掲げられたものです。17ある目標のうち、15番目に「陸の豊かさを守ろう」というのが、表題として挙げられています。その中の、「陸の豊かさを守ろう」というのは、まさにこの生物多様性の保全の目標になっています。その中で、植物園はそういったことに関して、国内外でたくさんの植物園が、野生植物、特に絶滅危惧植物とか希少種のそういった植物を対象にして、生息域外保全に取り組んできております。それがうまく繁殖できれば、それを野生に復帰させたいというところまで含めて、植物園が取り組んでいるわけです。そこには、これまで培ってきた栽培技術というのが最大限に生かせる、それはもう大学ではできなくて、植物園ならではの取り組みとして出来ることだと思っております。ぜひとも応援していただければと思います。

それと、これまでの100年ですが、やはりこの展示を中心とした憩いの場として、府民あるいは来園者に定着してきたと思います。しかし、この機会に100年経とうとして、創設時にある意味立ち戻った形で、これからの植物園のあるべきコンセプトを考える。そういう場として、この懇話会が設けられましたし、これまでも様々な委員会を通して議論されてきました。私自身は、府立植物園は時代に合わせて、京都府の活動が表に見える看板として、国内外に誇れる植物園とグレードアップさせたいというふうに思っております。そのために、

今まで不十分であった生物多様性に向けた研究だとか、或いは、委員の皆様からいろいろご指摘ありました海外向けのサービスや、京都としての立地を生かした魅力発信、さらには、きちんとした教育方針とかプログラムというのはまだありません。もちろん、雨が降っても暑くて寒くても、憩える・楽しめる施設のようなものもありません。そういったものの充実がこれからの施設として必要だろうと思います。

植物園になぜ研究が必要かっていう理由は割合シンプルで、実は 2006 年に日本植物園協会がまとめた定義があります。公園と植物園は何が違うかということが定義されていて、それは植物園には研究が必須であるということが書いてあります。研究とは何かというと、植物に関する植物学の研究ということになっています。水上先生はその辺よくご存知だと思いますけれども、岩科先生は当時の会長じゃなかったのですが、おそらく様々いろんな意見が植物園の中に葛藤があって、何が違うということについていろんな議論があって、2006 年にその違いを、日本植物園協会から発信されたのかというふうに思います。いずれにしても足りないことはたくさんあるわけです。

それから、全体的なことについてですが、8 ページに今後の植物園整備というのは、ソフトに加えて、ハード面の整備がもちろん大事なわけですが、全部が実現しないまでも、その両者の連携がとても大事だというふうに思っております。そのために、植物園をよく知る職員がしっかりその辺を議論しながら、考えていきたいというふうに思います。

欧米の植物園見ていると、来る人も働いている人も植物園に行くことはステータスだと思っています。誇りなんですよ。京都府立植物園をそういう植物園にグレードアップできればと思っています。そのために、皆様からたくさん大変貴重なご意見をいただきました。それが実現できればどんなにいいかなということがたくさんありました。これから先も、引き続き委員の皆様には専門的な視点、幅広い視点からご意見と応援をいただければと思います。どうぞよろしく申し上げます。どうもありがとうございました。